

NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

July 2016 vol.24



島根県芸術文化センター
SHIMANE ARTS CENTER
島根県立石見美術館
IWAMI ART MUSEUM

島根県立石見美術館ニューズレター

企画展「誕生60周年記念 ミッフィー展」
ミッフィー その魅力とは

企画展「芳年 激動の時代を生きた鬼才浮世絵師」
技あり! 水中戦のリアリティー 芳年の巧さと魅力

文化芸術ってなんだ?
これからのグラントワ

24

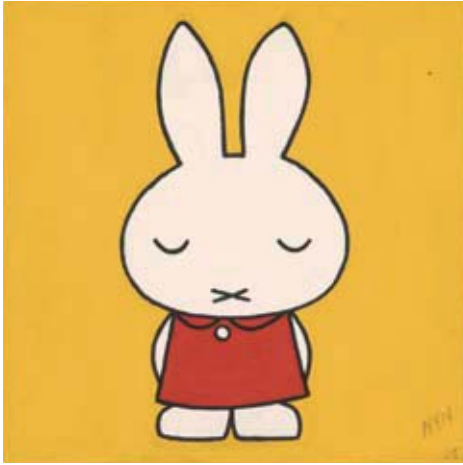


月岡芳年《浪裡白跳張順黒旋風李逵江中戦図》
明治21年(1888)

「誕生60周年記念 ミッフィー展」

2016年9月17日(土)～10月31日(月)

休館日:火曜日 開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)



A



B



C

A. 『ちいさなうさこちゃん』(第2版)原画 1963年

B. 『ちいさなうさこちゃん』(第2版)原画 1963年

C. 『りんごぼうや』(第1版)原画 1953年

Illustrations Dick Bruna © copyright Mercis bv,1953-2016 www.miffy.com

ミッフィー その魅力とは

今から60年以上前の1955年、オランダの絵本作家でありグラフィックデザイナー、ディック・ブルーナが描くミッフィー(うさこちゃん)が誕生した。日本では、1964年、世界に先駆けて翻訳され、その絵本が福音館書店より刊行された。多くの人々が、幼い頃に親しんだ経験をもっているのではないだろうか。ミッフィーの絵本は、現在でもなお多くの子どもたちに読み継がれている。その魅力とは、一体どこからくるのだろうか。

まず、目をひくのは、シンプルな形と色による造形だろう。

ミッフィーや彼女をとりまく家族や友だちは、可能な限り要素を削ぎ落とした形で表わされた。個々のキャラクターは、その大きさや表情、服装などのごくわずかな違いより描き分けられている。場合によっては、描き分けられていないようにも見える。ミッフィーと他の登場人物とを区別するのは、読み手にゆだねられることすらあるのだ。

個々のキャラクターをかたどる線は、一見簡単に描かれたように見える。しかし、実際は、もっともふさわしい形を探るのに、ブルーナは数多くのスケッチを重ねるという。そうして見出された形は、点を打つようにゆっくりと慎重に描かれた線によって描きだされる。この手描きの線こそが、簡潔な形を組み合わせ

せて構成されるキャラクターに、独特の暖かみを添えているようだ。

絵本にはまた、赤、青、黄、緑、茶、グレーの6色、いわゆる「ブルーナカラー」と、輪郭線の黒色のみが主に使用されている。そうした色は絵本のなかで、登場人物の置かれたシチュエーションや感情を伝えるのに、重要な役割を果たしている。黄色は屋内のシーンなどで「明るくて天気の良い日のような感じ」を表すハッピーカラーとして用いられ(図A)、また緑色は屋外(図B)を表しているという*1。

こうした独特のスタイルはどのようにして確立されたのだろうか。ブルーナは、若い頃、出版業の修行のためパリに滞在し、そこで出会ったモダンアートから大きな影響を受けたとしばしば語っている。パリでは、アンリ・マティスやフェルナン・レジェ、ピカソ等の作品に出会い衝撃を受けた。例えば、この頃マティスは絵画表現における色彩と輪郭線の関係を突き詰め、切り絵という一つのスタイルに到達していた。このような先達の芸術表現にあらたな地平をひらく試みに刺激を受け、ブルーナは、独自のスタイルを模索するようになる。

1951年に父親の経営する出版社にグラフィックデザイナーとして加わり、ポスターや

書籍の表紙のデザインを担当した。現場では、コスト面からの制約もあり、限られた色数で、見る者を惹きつけるデザインが求められた。そうした経験もまた、ブルーナ独自の制作スタイルの成立に影響を与えているだろう。1953年からは絵本の創作を始めている(図C)。ブルーナは制作に際し、「色と形は等しく重要なもの」*2ととらえていたが、絵本制作に際しては、文字もまた重要な構成要素とみなした。絵本の判型を縦長から正方形に変更すると、テキストはすべてのページが4行に収まるように配し、フォントにもイラストと同様の太めの線を用いるなど、全体の調和を損なわないよう工夫した。また、本文も韻を踏むなど、言葉の響きやリズムに気を配っている点も見逃せない。

このように、単純な要素で構成されたブルーナの絵本には、見る者を刺激する様々な仕掛けが散りばめられている。絵本という表現に新しい可能性をひらいたブルーナの著作は、今もなお子どもだけでなく大人をも惹きつけてやまない。

*1 「ディック・ブルーナ 新作絵本を語る」『美術手帖』2010年4月号、19頁

*2 「ディック・ブルーナ辞典」前掲書、34頁



図1



図2

図1.《文治元年平家の一門亡海中落入る圖》 嘉永6年(1853)

図2.《東錦浮世稿談 若鳴権右エ門》 慶応3年(1867)

技あり! 水中戦のリアリティー—芳年の巧さと魅力

幕末から明治にかけて活躍した浮世絵師、月岡芳年(1839-1892)は、英雄たちが派手な立ち回りを演じる武者絵、あるいは残虐な刃傷沙汰を描いた「血みどろ絵」などと称される作品群で知られる。これら劇的な画面において目をひくのは激しいアクションや鮮烈な色彩であるが、火や風、そして水といった形のないものの描写も見逃せない要素である。ここでは一例として水中の描写に注目し、時代順に3つの作品を見ながら芳年の技の巧みさを紹介したい。

11歳で人気絵師、歌川国芳に入門した芳年は、ペリーが来航した嘉永6年(1853)に14歳でデビューした。その初作とされる《文治元年平家の一門亡海中落入る図》(図1)は、碇を背負った平知盛を中心に、壇ノ浦の合戦で海中に身を投じた平家一門の姿を描いたものだ。海底にうごめく平家蟹の群れや、黒と青の縞で表した潮の流れなどは、師、国芳に倣ったものである。この図で面白いのは、水流を表す縞がマンガでいうところの集中線の役割を果たし、知盛に視線が集まるようになっていくところだ。その主役を安徳帝や二位の尼、平教経らおなじみの人物が取り囲む、歌舞伎の舞台を絵解きしたような画面構成である。

それから15年後、大政奉還の年に刊

行された講談を題材としたシリーズ《東錦浮世稿談》に、水底の鐘を引き上げるため淵に潜る屈強な若者を描いた一枚がある(図2)。画面全体に青色をかけ、明るい二筋の光で鐘の存在を暗示する。まるで生き物のように行く手を阻む海草や、背景で渦巻く水流が、水の抵抗の激しさを物語っている。説明的であった図1に比べ、映画を見ているかのような臨場感が感じられる。

明治維新を経て、芳年も他の画家たちと同じく、明暗の表現や遠近法、透視画法など西洋画の技法を取り入れていった。明治18年(1885)からは「縦二枚続」といわれる縦長の画面形式に取り組んだ。その中でも「水滸伝」の豪傑二人が水中で取り組み合う《浪裡白跳張順黒旋風李逵江中戦図》(表紙)は、簡潔な構成ながら迫力満点の傑作である。前の二作では水流を表す線が背景を埋めていたが、ここでは背景は無地で、ぼかしを用いた青い筋を人物の上に、うすくかけている。図2と比べると、「水中らしさ」の演出よりも人物の動きや表情を前面に出した、感情移入しやすい作品といえよう。とはいえ空間の描写を怠っているわけではなく、むしろより巧みな、縦長の画面ならではの工夫が見られる。

画面左上の二匹の魚は下降する人物と

逆方向に泳ぎ、水面がはるか上にあることを示している。濃淡をつけて描かれた海草は海底の奥行きを表し、海底から二人を見上げていくかのような蛸は、上から下への動きを受けとめる役割を担っている。実は国芳にも水中での格闘を描いた作品があり、水を表す青い筋や、上昇する二匹の魚はそこから引用したことが分かるのだが、芳年はそれらを明治の人々、そして現代の私たちの目にも新鮮に映る表現にアレンジしている。

人物の彫りの深い顔立ちからは、芳年が浮世絵の平たい顔の描写をやめ、西洋風の表現を獲得したことが見てとれる。しかし私たちがこの絵から感じるリアリティーは、同時代の洋画家たちが目指した西洋絵画の写実とは異なるものである。人物の大きな表情やアクロバティックなポーズ、線や色面による水や光の描写、モチーフの配置による奥行き表現……これらは芳年の活躍期から約百年後のマンガにも共通する特徴である。芳年がこうした表現をどのように獲得したかの検証はここではできないが、卓越した画技の数々を展覧会場で目撃し、みなさんが知っている現代のビジュアルイメージとの共通点を、ぜひ探してみたい。

※文中の年齢は、数え年で記した

(川西由里 当館専門学芸員)

これからのグラントワ

昨年度はグラントワ開館10周年という記念すべき年でした。記念式典を開催したほか、劇場でも美術館でも、普段の年よりも規模をやや拡大して事業を行ったところ、来館者数は開館2年目の2006年度に次ぐ歴代2位(393,066人)を記録。来館していただいた皆様、支援して頂いたボランティアの皆様、関係者の皆様、本当にありがとうございました。

今年は開館11年目。次の20周年を目指して、職員一同、また新たな事業に取り組みます。

さて、ニューズレター21号(2015年2月)で、椋木学芸課長(当時)が「開館10周年を迎えて 100年に向かう10年」と題し、グラントワが設置されるに至った理由と経過、特色や使命についてこう述べています。“この建物は100年、200年の時間に耐える。だからグラントワは、その長い時間をかけて、地域の文化振興の役割を超え、もっと広い意味で、この地域の核であり、誇りでもあるような施設にならなければならない”。

まさにその通りなのですが、今回はこの記事とは少し異なった視点で、これからのグラントワについて述べてみたいと思います。

まず、このグラントワは、市内外、県内外、国内外からたくさんの方が集う施設であり

続けることが大切だと思っています。音楽や演劇を鑑賞に来た人、美術館の展示を見に来た人、合唱や音楽やダンスの練習に来た人、会議で来た人、イベントで来た人、建築を見に来た人、ふらっと立ち寄った人、雨宿りや昼寝に来た人…。理由はなんでもいいのです。ともかく、人の息遣いや、話し声や、足音や気配がある、生きた施設にしたいと思います。

また、地域に密着しながら、地域の中に閉じてゆくのではなく、広い世界に開かれた“大きな扉”のような施設にしたいと思います。歴史を掘り下げることで、人類や宇宙の広大な未知に近づいてゆくように、文化や芸術を突きつめてゆけば、それがいかに伝統的でこの地域にしかない固有に見えるものであったとしても、その先には無限の世界が広がっています。文化や芸術を通じて、ぬくもり、癒し、心地よさと、自分たちが暮らすこの地域の過ごしやすさを再認識してもらおうと同時に、本物の技術や芸術性に触れ、視野を広げ、世界観を変え、激しく心を揺さぶられるような新鮮な刺激を感じてほしい。グラントワが、癒しもあれば刺激もある、懐の深い施設になればと思います。

子供たちにとっても大人たちにとっても、ますます厳しくなる社会状況や経済状況の中

で、現状を維持するのが精いっぱい。国際社会も、紛争や災害が絶えず、難民や貧困で揺れ動いている。こんな不安定な世の中で、先々のことを考える余裕もなければ見通しもない。ひょっとするとこれが現実なのかもしれません。しかし、グラントワの運命はできるだけ長い目で考えたいと思います。

目先の時間の範囲でだけ考えていると、「あれもこれもダメだった(あるいはよかった)」と過去形にしかありませんが、長い目で見ると、「もっと良く(あるいは悪く)なるかもしれない」という可能性が生まれます。その希望や、希望とは裏腹の心配がなければ、自分が次に何をやるべきか見えてくるはずはないし、創造(想像)性や創造(想像)力も産まれるはずはありません。そして創造(想像)性や創造(想像)力がなければ、社会の風通しがよくなるはずもないのです。

創造(想像)性や創造(想像)力は、人間にとってとても大事な能力だと僕は考えています。時代は変わります。時代が変わるから新たな取り組みをする意味もあります。グラントワもそのような未来に向かう施設になればと思います。

でも、文化芸術ってなんだ？

(若槻真治 グラントワ副センター長)



図1



図2



図3

図1. 青いグラントワ
図2. 赤いグラントワ
図3. 白いグラントワ

Photo. Shinji Wakatsuki